

2024年度 一般選抜問題
後期日程 2024年3月10日(日)

選 択 科 目
(数学・国語・論文総合)

数 学	……………	1～6 ページ
国 語	……………	7～21 ページ
論 文 総 合	……………	23 ページ

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 3科目型の受験生および3科目型と2科目型を併願する受験生は上記から2科目を、2科目型の受験生は、上記科目と英語から2科目選択してください。但し受験票に記載された科目以外を受験すると0点となります。
3. 解答用紙には、「**数学**」(青色)と「**英語・国語**」(赤色)、「**論文総合**」(記述式)の3種類があります。
4. 試験開始後、解答用紙に受験番号と名前を必ず記入してください。
5. マークシート用紙には受験番号をマークしてください。英語、国語については、解答する科目を一つ選び、科目の右にマークしてください。また解答科目欄に科目名を記入してください。正しくマークされていない場合または複数の科目にマークされている場合は0点となります。
6. 解答はすべて解答用紙に記入してください。
7. 問題用紙の余白は計算に使用してもかまいませんが、解答用紙を汚してはいけません。
8. 試験開始後、問題用紙・解答用紙に落丁・損傷がないか確認してください。
9. 数学の問題の冒頭には「**解答上の注意**」が記入されていますので、必ず読んでから解答してください。
10. 試験終了後、問題用紙は持ち帰ってください。

国語

1 次の問い（問1～4）に答えなさい。

問1 ア～エの傍線部のカタカナに相当する漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

ア 資源のユカツが問題視される。 1

- ① 分析結果をガイカツして記す。
- ② 世界平和の実現をカツボウする。
- ③ その事業は厚生労働省のカンカツだ。
- ④ 誌面の都合で文章の一部をカツアイする。

イ 相手のチヨウハツに乗らずに冷静に対応する。 2

- ① 全身をばねに華麗なチヨウヤクを見せる。
- ② 関係者から事情をチヨウシュする。
- ③ 未知の領域にチヨウセンする。
- ④ 勉強会の日程をチヨウセイする。

ウ 話の続きをサイソクする。 3

- ① イチゴをプリンターでサイバイする。
- ② 歓迎会をシュサイする。
- ③ 相手チームをフンサイする。
- ④ 歌手がステージ上でカツサイを浴びる。

エ 会社のフチンに関わる大事が生じる。 4

- ① 恩人のフホウに接する。
- ② 景気をフヨウさせる策を講じる。
- ③ 備品を購入する費用をフタンする。
- ④ 荒地を開拓して鉄道をフセツする。

問2 ア・イの四字熟語の空欄 5、6 に入る漢字を、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

ア 虚 5 坦懐

① 真 ② 新 ③ 信 ④ 心

イ 多 6 亡羊

① 器 ② 機 ③ 岐 ④ 企

問3 ア～ウの慣用表現の空欄 7、8、9 に入る漢字を、次の①～⑨の中からそれぞれ一つ選びなさい。

ア 間 7 を容れず

イ 堪忍袋の 8 が切れる

ウ 待てば 9 路の日和あり

① 尾 ② 海 ③ 御 ④ 復 ⑤ 髪
⑥ 口 ⑦ 発 ⑧ 隔 ⑨ 緒

問4 ア～ウに該当するものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

ア 夏目漱石が小説『坊っちゃん』を発表した俳句雑誌 10

① 『ホトトギス』 ② 『白樺』 ③ 『アララギ』 ④ 『我楽多文庫』

イ 尾崎一雄の著作 11

① 『真空地帯』 ② 『虫のいろいろ』 ③ 『金閣寺』 ④ 『城の崎にて』

ウ 羽田圭介の著作 12

① 『コンビニ人間』 ② 『冥土めぐり』 ③ 『火花』
④ 『スクラップ・アンド・ビルド』

2

次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

時間がそのうちに孕む差異は、昼と夜だけではない。去りゆき、巡り来る^A季節も、反復することなく順を追って推移し、経過してゆく幼年期・少年期・青年期・壮年期・老年期といった人生の時も、非同一的な差異が継起するものとしてある。冬が春になり、夏が過ぎ、秋が来て冬になるように、季節は「移りゆきながら巡り来る時」という差異を孕んだ同一性を構成している。人生という時の流れは、幼年期はそれに先立つ誕生やそれ以前の未生の時の後に来て、やがて少年期や青年期となり、壮年期、老年期を経て死を迎え、その後には死後の時——それがどのようなものであるとするかは民族や宗教によつてさまざまだが——にいたる。一人の人間の人生の時において、これらの時は並置されることはなく、人生のある時期から次の時期へと移つてゆく。

世界のなかの何かが、かつてあつた状態から別の状態になり、さらに現にある状態から別の状態になるであろうこと、その変化するそれぞれの様相の差異と、様相間の変動を言語によつて対象化するところに、私たちが「時間」と呼ぶものが、言語媒介的に対象化され、表象・表現 (represent) される。ある「時」はそれに先立ち、それとは異なる別の「時」を潜在的にもないつつ、それとは異なるものとして存在し、さらにまた、それに後続する、やはりそれとは異なる「時」の到来を内含している。昼夜も四季も人生のなかの区分も皆、そのような「差異化するものの同一性」において見いだされるのだ。^B ここでは到来し、過ぎ去る異なる時の非同一次性が、共に同じ「時」であるという同一性のなかに見いだされるのである。

私たちが「未来（の時間）」と呼ぶのは、世界のなかの事物の振動や反復や継起を「時」やそれに類する同一の言葉、範疇^{はんちゆう}によつて表象し、対象化する時の「今よりも後の時」のことだ。「次の昼」は「この夜」の未来であり、「明日」や「明後日」は「今日」の未来である。差異づけられた非同一的なものとして過去と現在と未来が、同じ時間のなかで継起し、取つて代わつてゆく。哲学者のジョン・E・マクタガートは、時間においては「同じ時」が「未来」でも「現在」でも「過去」でもありえてしまうことを矛盾だとして、それを時間の非実在性の論拠とした。たとえば二〇一四年四月一七日という同じ時は、二〇一四年四月一六日以前では「未来」だが、二〇一四年四月一七日には「現在」になり、二〇一四年四月一八日以降には「過去」になる。

「未来の時間」のありかは、時間におけるこの〈非同一次性の同一性〉のなかにある。マクタガートが「矛盾」だと言つたこのことこそが、「時間というもの」の本質であり、それが「未来の時間」のありかを生み出すのだ。

異なる様相を変動するものであるという時間の特徴と、時間が言語媒介的な制作物であるということとの間には、実は不可分な関係がある。

人間の言語の特徴の一つは、「今・ここ」に存在しないものを、「今・ここ」において表象できるといふことである。言語学で「転移性 displacement」と呼ぶ^Cの特性は、「displacement」という言葉が示すように時間的な表象だけでなく、「ここ」にいない人について語る」といった空間的な表象にも関わっているのだが、時間的な表象には空間的な表象と異なる点がある。「ここ」にいない人について語る時、その人がいる「あそこ」と、語る私たちがいる「ここ」とは同一の空間的な世界で並置された異なる場所であつて、「あそこ」が「ここ」になったり、「ここ」が「あそこ」になったりすることはない。そして「ここ」にいる私にとつて、「ここ」ではないどこかに「あそこ」があること、つまり「ここ」と「あそこ」とが同じ空間のなかで同時に実在する場所であることが、事実として受け入れられている。私たちが通常行う言語表象においては、「ここ」と「あそこ」は端的に非同一的な、決して同

一ではありえない「別の場所」として並存しているのだ。

他方、私たちが「過去」や「未来」という「今」ではない時について語る時、「過去」や「未来」と「現在」とは同一の場所のなかにも時のなかにも並存してはいない。もちろん、たとえば歴史年表のように過去から現在を経て未来に至る時間の流れを一望するような表象の形式をとれば、そのなかで「過去」「現在」「未来」は「同じ時間の流れ」のなかに並存しているものとして表現される。だが、そのような表現を用いる時でも私たちは、「過去」や「未来」が、「ここ」と「あそこ」と同じように「現在」と並存しているとは考えない。私たちは通常、「今ごろ未来では〜」などという風には考えない。私たちが「過去」について語る時、「過去」は「現在」に先立ち、「現在」を準備し、生み出し、捉え、それを「未来」に向けて方向づけうるものとして語られる。また「未来」について語る時には、そのような「過去」を経て現にある私たちが「現在」のなかから向かい、意志し、欲望し、夢見、創り出し、到達するであろう時として「未来」を語る。そしてそのような「過去」と「未来」に挟まれ、「過去」から「未来」に向かう時として、私たちは「現在」を考える。「過去」と「現在」と「未来」は差異化されているけれども単に別の時ではなく、同じ時間——文字通り「時の間」——のなかの別の時Ⅱ様相である。私が「現在」について何かを語る時、そこではそれに先立つ「過去」や後続する「未来」との関係が前提となっている。「過去」は「現在にとつての過去」であり、「未来」は「現在にとつての未来」であるという風に、「過去」も「未来」も「現在」との関係のなかにある。「現在」は「過去」と「未来」の間にあり、「すでにあったことⅡ過去」と「未だないことⅡ未来」との間の移行、つまり非同一的なものとの間の差異を、その同一性のうちに内含しているのだ。

^Dこのことは、過去・現在・未来という時間の様相だけに当てはまるのではない。「今は昼だ」という場合、それは単に「夜ではない」というだけでない。「今は昼だ」という表象のうちには、「昼と夜とが繰り返す時間」というより上位の同一性の下での昼と夜との差異Ⅱ非同一性が、すなわち「今は夜ではなく昼だが、やがてまた夜になる」ということが、つねに内含されている。「春」には「過ぎ去った冬」と「やがて来る夏や秋」が、そしてまた「去年の春」も含む「繰り返しやってくる過去と未来のあらゆる春」や、それに先立ち、引き続いてきた「あらゆる夏や秋や冬」が、既定的な潜在性と未定的な可能性として、やはり内含されている。そうした潜在的な可能性と、「いま・ここ」を超える現れと展開をもつというあり方は、時間が転移性をもつ言語によって制作されたものであることよって可能になっているのである。

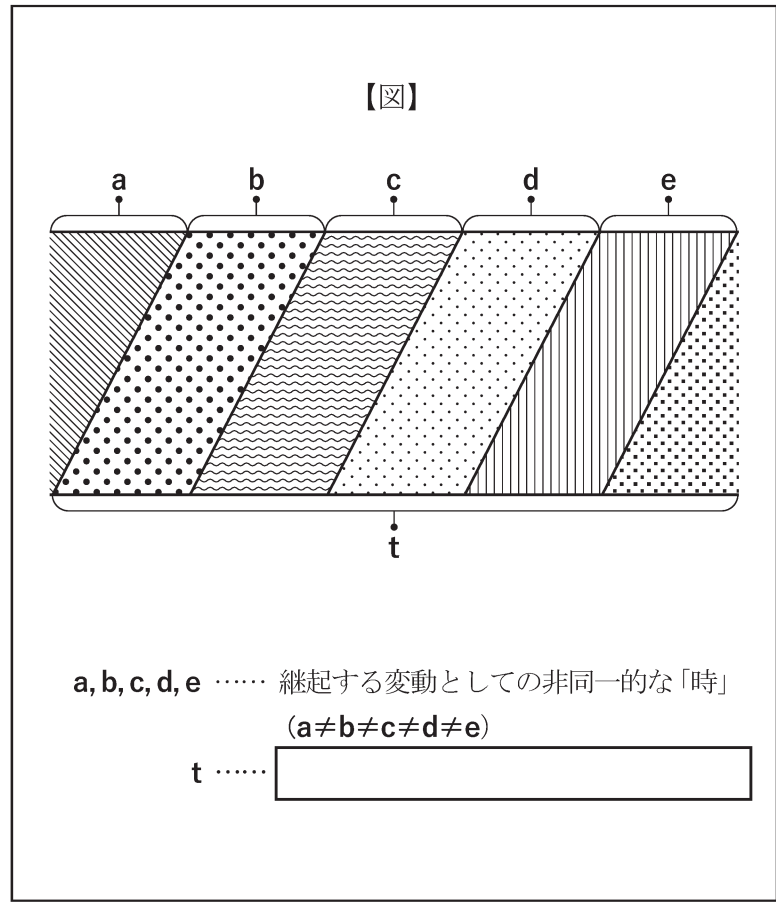
(若林幹夫『未来の社会学』による。なお、本文中に一部省略したところがある。)

問1 傍線部A「季節」について本文に即して説明したものととして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 13

- ① 「春→夏→秋→冬」と決まったサイクルを繰り返し、常に過ぎ去っていくものである。
- ② 冬が終わればまた春が来るように、一つ一つの季節は循環しながら反復するものである。
- ③ 春夏秋冬が併存することはなく、同じ「時」が限りなく繰り返されてゆくものである。
- ④ 「過ぎ去った春」と「やがて来る春」は別のものであり、同じ性質をもつものである。

問2 傍線部B「そこでは到来し、過ぎ去る異なる時の非同一性が、共に同じ『時』であるという同一性のなかに見いだされる」とあるが、これについて後の問いに答えなさい。

① 傍線部Bの内容を表した次の【図】の空欄に当てはまる表現として最も適当なものを、後の①～④の中から一つ選びなさい。 14



- ① 非同一的な差異が継起する「時」
- ② 同一性のなかの非同一性としての「時」
- ③ 非同一的な「時」を内含する同一性としての「時」
- ④ 同一なものが連続する一つの流れとしての「時」

(2) 傍線部Bを具体例で説明したものとして適当なものを、次の①～⑤の中から二つ選びなさい。ただし、解答の順序は問わない。

15

16

- ① 「明日」や「明後日」は「今日」の未来であるが、「今日」は「明日」や「明後日」の過去ではないということ。
- ② 「昨日」と「今日」と「明日」は同時には存在しない異なる時であるが、同じ時間軸のなかの別の様相であるということ。
- ③ 「今日の18時」は「今日の12時」の未来であり、どちらも時計が刻む時間であるという点で同一であるということ。
- ④ 「未来」とは「今よりも後にやって来る時間」であり、「過去」と「現在」と一続きに存在しているということ。
- ⑤ 「今年の冬」は「今年の秋」を潜在的にともないつつ、それに続く「来年の春」の到来をも内含しているということ。

問3

傍線部C「時間的な表象には空間的な表象と異なる点がある」とあるが、「異なる点」について説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から二つ選びなさい。

17

- ① 「ここ」と「あそこ」は「別の場所」として同時に存在していると考え、「過去」や「未来」が「現在」と同時に存在しているとは考えないということ。
- ② 「ここ」と「あそこ」は「別の場所」であり入れ替わることはないが、「過去」は記憶のなかで書き換えられて別のものになることがあるということ。
- ③ 「ここ」と「あそこ」は別の空間的世界に分かれて存在するが、「過去」と「現在」は「未来」という同一の空間的世界に存在していると考えられるということ。
- ④ 「ここにいない人」が「あそこにいる人」と同一でありえるが、「現在いる人」が「過去にいる人」や「未来にいる人」と同じとは限らないということ。
- ⑤ 空間の場合は、「どこか」が現在存在していると考えることができ、時間の場合は、「いつ」という時間は現在においては存在していないということ。

問4

傍線部D「このことは、過去・現在・未来という時間の様相だけに当てはまるのではない。」とあるが、「このこと」の内容に当てはまるものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

18

- ① 「春夏秋冬」と言うとき、その言葉の表象する概念のなかには、繰り返しやってくるあらゆる季節に共通する普遍の規則が暗黙裡あんもくりに含まれているということ。
- ② 「昼」と「夜」は異なる概念であっても時間的な連続性のなかに存在しているように、異なる概念であっても同一のものなかに併存することができるということ。
- ③ 「今年の春」と言うとき、かつての「春」や以降の「春」が意識のなかに存在しているように、一つの「時」のなかに、別の「時」との関係性が内含されているということ。
- ④ 「春」はやがて「夏」にも「秋」にも「冬」にも変わるという点で、同一のものなかにだけとどまるのではなく、異なる様相を変動するものであるということ。
- ⑤ 「今は昼だ」が「やがて夜になる」という意味であるのと同様に、複数の意味が同一のものななかで混ざり合い、非同一な新たな意味を生み出しているということ。

問5

次の〈資料〉は、本文と同じ出典の別の部分から引用したものである。波線部「言語媒介的な制作物としての時間」とあるが、「時間」が「言語媒介的な制作物」と言えるのはなぜか。本文と〈資料〉に即した説明として最も適当なものを、後の①～⑤の中から一つ選びなさい。

19

〈資料〉

時間は空間やそのなかの事物と同じように存在するものではない。そんな時間について『地形』『歩き方』『眺め』『風景』『地図』といった、空間とそのなかの事物に関して用いる言葉を使おうというのは、奇妙というよりも「間違ったこと」のように思われるかもしれない。なるほど、「或る種の哲学的問題が引き起こす乗り越えがたい困難の原因は、本来は空間のうちに場所を占めない現象を空間のうちに執拗に併置しようとする点にあるのではないだろうか」とベルクソンも批判しているように、時間や時間的な経験を空間的に表象することは、時間の本質を捉え損ねるものだとしばしば考えられてきた。だが、にもかかわらず人間は時間を、それが空間的なものであるかのようにしばしば捉え、それを空間的な語彙で表象してきたのである。

私たちは自分を表現するのに言葉に頼らざるをえないし、またたいていの場合、空間のなかでものを考えている。換言すれば、言語というもののために、私たちは私たちのもつ観念相互のあいだに、物質的対象相互のあいだにあるのと同じような明確鮮明な区別、同じ不連続性を立てざるをえなくなってしまうのである。こうした同一視は実生活では役に立っし、大部分の科学では必要でもある。

ベルクソンはこのように述べている。だが、時間とは世界のなかの非同一性を同一的なものの変動や推移として表象する言語媒介的な制作物であるのだとすれば、ベルクソンが批判する「時間の空間化」はむしろ、言語媒介的な制作物としての時間の本質であると言いうこともできるだろう。

(資料中に一部省略したところがある。)

- ① 時間とは非同一性をもつものを同一的なものとして表象したものであり、その性質は「今・ここ」に存在しないものを「今・ここ」において表象できる言語の転移性と本質的に通じるところがあるから。
- ② 時間には実体がなく、異なる様相を変動するものであるという特徴があるため、刻一刻と変化していく時間の様相を一つに定義するには、人間が言語を用いて対象化することが不可欠であるから。
- ③ 時間は空間のうちに存在するものではないという点で事物のように目に見える物理的な形体はないが、人間の記憶という空間のなかでは人間や事物と同様に実体として想起することができるところから。
- ④ 人間は言語によって時間を空間的な語彙で表象することにこだわるあまり、言語によっては媒介できない時間の本質を捉え損ない、時間を明確鮮明な区別、不連続性をもつ事物と同一視しているから。
- ⑤ 人間は時間を空間的なものであるかのように捉えており、空間的な位置をもたない時間についても言語で表象することによって、はじめて時間の本質を捉えることができるようになったから。

問6 本文の論の展開と構成を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ

選びなさい。

20

- ① はじめに時間が非同一次性を超えた同一性のなかに存在するものであることを述べ、人間にとつて「未来」とは事物の振動や継起を「時」に関する言葉によって表象したものであることを示したうえで、実体のないものを言語で表象することの難しさを説明している。
- ② はじめに人生の時は非同一次的な差異が継起するものであり、季節は差異を孕んだ同一性をもつものであることを説明し、過去・現在・未来は差異づけられた非同一次的なものであるとしたうえで、既定的な潜在性と未定的な可能性についてまとめている。
- ③ はじめに季節が“移りゆきながら巡り来る時”という同一性をもとに構成される概念であることを指摘し、その理由が言語媒介的に対象化された存在である時間のあり方によるものであることを、豊富な具体例を挙げながら説明している。
- ④ はじめに世界のなかの変化するそれぞれの様相の差異と様相の変動を言語化したものが「時間」の概念であることを「同一性」「非同一次性」という観点から説明し、そのために生じる矛盾や問題点について、言語との関係を踏まえて明らかにしている。
- ⑤ はじめに差異を孕んだ同一性を構成するという時間のあり方を説明し、言語で表現された時間と空間の違いを述べることで、冒頭で述べた時間のあり方がここにはないものを語ることができる言語の性質に依拠していることを説明している。

3

次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

天然痘にかかった「ちとせ」は、後遺症による失明の不安を抱えながら、漁村に住む家族のもとを離れて、三味線奏者をめざして京都で師匠の「お菊」のもとで暮らしているが、徐々に視力を失いつつある。

「一晚寝て、波打っていた気持ち少し鎮まった。しかしかえって心が沈んだ感じさえする。黙々と朝餉を取り、そのあと庭に降りて洗濯をする。力を入れて擦る気力が起きず、ただただ腕を動かす。「ちとせ、このままやと仕事に遅れてしまうから、悪いけど今日の稽古はなしや」

縁側に立つお菊の声に我に返ったが、これから急いで洗濯を済ませるから待ってくれと言う気分にもなれず、

「分かった」

と応えた。正直なところ、背筋を伸ばして三味線を構えることすらできそうにないので、稽古がないならそれに越したことはない。

お菊が、怪訝な顔をして近づき、手を伸ばしてちとせの額に触れた。

「別に熱があるわけやなさそうやね」

「何ともない。雨が降りそうな天気やから、気分が上がらんだけや」

「それならええんやけど」

お菊が座敷に戻って支度をしている間に、ちとせはゆつくりと手拭いを絞り終える。

「ほな、行って来るわ。留守をよろしく」

「分かった。氣いつけて」

足袋に畳が擦れる慌ただしい音が遠のいて、少ししてから戸が閉まる音がした。ちとせは息を吐いて立ち上がると、またゆつくりと着物を干す。

洗濯を終えて座敷に上がる。巻貝を取り出して耳に当てると、文机に伏した。

「やりたいことが分からんようになるのが、こんなに辛いことやとは思わなかった」

ちとせは独り言ちて、部屋の隅に立ってかけてある三味線を見つめる。もちろん楽器として三味線が好きだ。できるだけ上手くなって、お菊のような音を奏でたい。

ただ自分が三味線に惚れていると感じるのは、誰かが自分の三味線に何かしらの言葉をくれる時なのだ。褒め言葉である必要はない。ただ自分の音を聴いて、そこから何かを思い出し、言葉にして伝えてくれる。そういう会話の真ん中に自分を連れて行ってくれる三味線が、自分の一部のような、どうしようもなく大切に愛おしいものに思えるのだ。だから自分の三味線は、他の人なしでは成り立たない。

ここまで分かっているのに、弾けない。人には聴かせられないと思ってしまふ。三味線を抱いて、その三本の糸に撥を当てるのが怖いのだ。一体どんな音が出てしまうのだろう。それを聴いてしまつたら、一生昔のような音は出せなくなる気がする。大袈裟と言われるかもしれないが、暗い予感に戦慄しているのは嘘ではない。

ぎゅつと体に入力を入れて目を瞑る。波に似た懐かしい音を手繰り寄せながら、次第にそれに吸い込まれるような心地さえして、そのまま眠りに落ちた。

同じような毎日を繰り返した。お菊はそんなちとせを黙って見ていたが、数日が経ったある日のことだった。朝餉を終えたあと、膳を差し挟んで不意に真剣な眼差しを向けた。

「ええの？ そのままずっと弾かんで」

問うというよりは決意を迫るような厳しい口調だった。ちとせは答えに詰まり、畳の上に視線を彷徨^{さまよ}わせる。

「だって弾けんのやもん」

「一度でも弾こうとしたん？」

「弾かんでも分かる」

「ただの取り越し苦労かもしれへんやんか。一日弾かんことで、今までせっかく積み上げてきたものが崩れていくんやで」

鋭くなる舌鋒^{ぜつほう}に、ちとせは泣き出したくなった。お菊なら分かってくれるだろうと思つたのに、どうしてそんなことを言うのだろう。どんな気持ちの時でも弾けると思っているのだろうか。

「ほんなら訊^きくけど、お菊さんは今まで三味線を弾けなくなったことはないの？ 私かてただ上手く弾けんから逃げたんやない。もちろん飽きたから放つておいてるんでもない。今は三味線を弾かんことで、これからもずっと好きでいられると思つたから弾かへんの」

^eきつぱりと言いつつお菊を見上げる。お菊の瞳が少し揺らいだように見えた。

「間を空けてと思つのも分かる。でも今弾くのをやめたら、またちゃんと弾けるようになると、うちは言い切れん」

「そうと決まつたわけやない。きつとまた別のもつとええ音が出せるはずや」

甘いわ、とお菊はぴしゃりと言つてから、^f手で口を覆つた。

「ごめんな、言い過ぎた。でも今の音から逃れる方法は、弾き続けることだけ。うちはそう信じとる。

一旦やめてもうたら、弾けと言われても弾けん」

「自分から弾こうと思えたら、話は別やろ」

ちとせが噛みつく^かくと、お菊の^g手がひくりと動いた。ちとせはそれを見て体を強張^{こわば}らせたが、^hすくⁱに視線をお菊の双眸^{そうまう}に戻す。

「そやから私はしばらく三味線には触らん。でもきつと、また弾くから。その時まで待つとつて」

^B啞然^{あぜん}とした表情のお菊の横を通り過ぎて部屋を出る。その勢いのまま道へ駆け出す。吹き付ける風に涙が攫^{さら}われるのを感じながら、足がもつれるまで走つた。結局辿^{たど}り着いたのは鴨川^{鴨川}だった。河原などに行つたら色々な人に泣き顔を見られる。下手をしたら^h稔^ねや藤之助にも会つてしまうかもしれないと思うのに、足が勝手にそちらへ向くのだ。

川向こうに向かつて叫び出したくなるほど、胸の中が掻^かき乱^{みだ}されている。叫ぶ代わりにちとせは苛^{いら}立^だつたように腕をまくり、手で水を掬^{すく}つた。そこに顔を突っ込む。水の冷たさがこめかみの奥に染みるようだった。手で顔を覆つたまま、ちとせは嗚咽^{おえつ}を漏らした。

「分かるとる、お菊さんも必死になつてくれとるんや。でも、今は弾けん」

どうしたらええ、とちとせは声を絞り出した。瞼^{まぶた}の裏に浮かぶのは母の顔ばかり。でも母は今、甘えられるところにはいない。

だがお菊のお蔭^{かげ}で淀^{よど}んで沈んでいた心に波が立ち、体に血が巡り始めた気がする。自分の頭で絡まっている糸を、解かなくてもいい、一本一本眺めてみようと思つた。

川端にいと、追おうとしている何かが風や水に溶けて遠いところへ流されていく不安に駆られるので、ちとせは来た道を戻る。

ちとせは道の真ん中でふと立ち止まった。通りを行く人が風呂敷などを手にして忙^{いそ}しく往来している。軒端^{のきず}を滑り落ちてくる朝日に照らされた色とりどりの着物、帯。そういうものを見ていると、

少し心が平静になる。人々の忙しなさを包むようなしっとりとした穏やかさ。この町の秋は、少し違う。ⁱ 建物を形作る木々に秋が染み込み、町全体が秋に浸かっているように感じる。

ちとせはその場で目を閉じた。下駄が地面を蹴る音、足が着物の裾をさばく音、昨日の夕立に濡れて一晩干した傘を、閉じて店の中に取り込む音。数百年の生活に溶け込んだ静かな音が、今日もまたこの町にこだましている。その中に自分がある。大きな流れの中にたゆたう一人というのは無力だが、その流れを光の帯と思えばどうだろう。その中の光の一粒というのは、とてもきれいなものではないだろうか。

そして目を開けても、そこに広がっている景色は音から得た想像と同じほどに美しい。夢から醒めたようになることもない。だから目が見えなくなっても、知っているはずの道が全く知らないものになることはないだろう。^C ゆっくりと瞼を開けると、視界は段々と光に満たされていった。

家に近づくと、三味の音が聴こえてきた。お菊の三味の音を初めて聴いたあの朝には気づかなかつた、寂しさとは違う濃い感情。なにかやりきれないような、後悔しているような。家にかかるのは躊躇われ、ちとせは外から庭の方に回った。^D 生垣に背中をつける。

やがてふつりと音がやんだ。その後もしばらくちとせは動かなかつた。

(高野知宙『ちとせ』祥伝社による。)

(注) 稔や藤之助——鴨川で三味線を弾くちとせと出会い親しくなった。稔と藤之助は親友の間柄。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の語句の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①

～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。 21、22、23

- | | | | |
|-----|----|--------|--|
| (ア) | 21 | 怪訝な | ① 不機嫌そうな
② 面白そうな
③ 不思議そうな
④ 心配そうな
⑤ 疑うような |
| (イ) | 22 | 戦慄している | ① 怒りを覚えている
② 抗 ^{あらが} っている
③ おののいている
④ 打ちのめされている
⑤ 焦っている |
| (ウ) | 23 | 取り越し苦労 | ① つまらない意地
② しなくてもいい苦労
③ 自信過剰
④ 考えすぎ
⑤ ひがみ |

問2 傍線部A「巻貝を取り出して耳に当てると、文机に伏した。」とあるが、この時のちとせの様子を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 24

- ① 早く三味線が上手くなってお菊のような音を出せるようになりたいという一心で練習を重ねてきたのに、このまま失明するかもしれないと思うと恐怖で頭の中がいっぱいになり、三味線を弾く気持ちになれないでいる。
- ② 三味線奏者になりたいという目標に向かって他のことは何も考えずに突き進んできたが、三味線奏者になる夢を諦めなければならなくなったことで、自分のやりたいことが分からなくなり、三味線を見るのもつらく現実逃避している。
- ③ 三味線に惚れ込んで、三味線さえ弾ければいいと思っていたが、病気の後遺症で視力を失いつつあるいま、耳まで聞こえなくなって三味線を弾けなくなってしまっているのではないかと不安でたまらず、音が聞こえることを確かめている。
- ④ これまではまだ三味線が好きで、自分の三味線を聴いてくれる人と交流することが喜びだったが、自分のめざす三味線との付き合い方に対する迷いや自分の今後に対する不安を直視することが怖くて、三味線と向き合う意欲を失っている。
- ⑤ これまでには誰かに自分の三味線を聴いてもらうだけで楽しかったが、まわりの人を喜ばせていたその音ももう一生出せなくなったことが悲しくて、巻貝を耳に当てて聞こえる故郷のさざ波に似た懐かしい音で心を癒やしている。

問3 傍線部B「啞然とした表情のお菊の横を通り過ぎて部屋を出る。」とあるが、この時のお菊とちとせの様子を説明したものととして適当でないものを二つ、次の①～⑤の中から選びなさい。ただし、解答の順序は問わない。 25、26

- ① お菊は、練習を休み続ければ技量が落ちる一方なので、気がおらなくても無理にでも練習したほうがよいと考えているが、ちとせは、今無理に弾いたら三味線が嫌いになりそうな気がして、少し時間を置こうと考えている。
- ② お菊は、三味線の音は休まず練習を続けていけば以前のような音に戻ると考えているが、ちとせは、今は弾かなくても三味線が好きなことに変わりはないので、自分から弾きたいという気持ちになると信じて待つてみようと思っている。
- ③ お菊は、ちとせの気持ちを尊重しているものの、このままちとせの腕が落ちていくのを黙って見過ごすこともできず忠告したが、ちとせは、お菊の言葉が本当は正しいと思っているものの、気持ちが追い付かず素直になれないでいる。
- ④ お菊は、三味線の練習をしないちとせに苛立ちながらも、ちとせの気持ちに配慮して慎重に言葉を選ぶほうとしているが、ちとせは、お菊が自分の気持ちを分かってくれていないと思つて悲しくなり、反抗的な物言いをしている。
- ⑤ お菊は、ちとせが三味線を弾かなくなったのは今の音から逃げているからだと推測しているが、ちとせは、自分も内心気にしていることをお菊に指摘されて思わずかつとなり、捨て台詞を残して部屋を出てしまった。

問4

傍線部C「ゆつくりと瞼を開けると、視界は段々と光に満たされていった。」とあるが、ここから読み取れるちとせの様子を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

27

① 自分のことを心配してくれているお菊にひどいことを言ってしまったと良心の呵責かしやくを感じていたが、目を閉じて、心を落ち着けたことで、お菊やまわりの人の気遣いを思い出し、もう一度お菊を説得する勇気が出た様子。

② お菊のおかげでこのまま何もしないでうずくまっているだけではいけないという気持ちになり、自分の頭の中で絡まっている糸を一本一本眺めてみるために、冷静に物事をみきわめようと決心している様子。

③ 目を開けたらもう何も見えなくなっているのではないかという不安に駆られながら、恐る恐る瞼を開けてみると、そこには昔から見知っている景色が広がっていたことで、心の底から安堵あんぶしている様子。

④ 色とりどりの着物を着た人々が行き交い秋の色に染められた美しい京の町や人々を、この目で見ることができなくなる日がやってくるという悲しみを痛感し、瞳の中をとめられない涙が満たしていく様子。

⑤ 目を閉じて耳をすませば人々の生活の気配は変わらずそこにあり、目が見えなくなったとしても全く知らない世界に一人で放り出されるわけではないと思えたことで、じわじわと気力が湧いてくる様子。

問5

傍線部D「生垣に背中をつける。」とあるが、ちとせのこの行動の理由を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

28

① 自分のことを叱ったお菊に対するわだかまりが残ったまま、家に入ってお菊と顔を合わせ、またお菊を傷つけてしまうことが怖かったから。

② お菊の三味線の切ない音色から、ちとせに対する複雑な思いを感じ取ったものの、今の自分を省みるとそのまま帰宅することがためらわれたから。

③ 勢いに任せて家を飛び出してしまったものの、お菊を傷つけてしまったことが三味線の音色から分かり、お菊に謝ろうという気持ちになったから。

④ お菊の三味線の音を初めて聴いた時とは違う、やりきれないような音を聴いて、お菊がちとせにひどく怒っているのが分かり、自分のふるまいを後悔したから。

⑤ はじめて聴くお菊の三味線の切ない音色から、お菊を失望させてしまったことを痛感し、自分のふがいなさを責められているように感じたから。

問6

波線部 a～i の内容や表現に関する説明として **適当でないもの**を、次の①～⑤の中から

一つ選びなさい。

29

- ① a 「手を伸ばしてちとせの額に触れた」、f 「手で口を覆った」、g 「手がびくりと動いた」などお菊の手にかかわる描写から、お菊のちとせを案じる気持ちや三味線の師匠としてちとせに向き合う心情がうかがえる。
- ② b 「ゆつくりと手拭いを絞り終える」、c 「ゆつくりと着物を干す」と「ゆつくりと」という表現を繰り返すことで、三味線を弾くことへの迷いから三味線への興味を失っていくちとせの心情を描いている。
- ③ d 「波に似た懐しい音を手繰り寄せながら、次第にそれに吸い込まれるような心地さえして」という描写から、海辺の故郷に思いをはせながらも、故郷を離れて懸命に自分の道を探っている少女の心情を印象的に表現している。
- ④ e 「きつぱりと言いつつお菊を見上げる」、h 「すぐに視線をお菊の双眸に戻す」から、師匠と考えが異なる中で三味線を弾くことに葛藤しながらも、自分の納得する形で進んでいきたいというちとせの芯の強さが読み取れる。
- ⑤ i 「建物を形作る木々に秋が染み込み、町全体が秋に浸かっているように感じる」という比喻表現を用いた情景描写によって、京都の町や人々の忙しないながらも穏やかなさまを効果的に描いている。

(このページは、空白である。)